

みみタロウ

日本語版 ☆100号 2013年6月

滋賀県国際協会 ボランティアグループ「みみタロウ」
 大津市におの浜 1-1-20 ピアザ淡海 2F
 Tel/Fax : 077-523-5646
 E-mail : mimitaro@s-i-a.or.jp
 URL : http://www.s-i-a.or.jp

たくさんの方々へありがとう!

今回100号のみみタロウは、20歳のナタリー・タジマ・ジアナさん(長浜在住)に新しい世代からのお話を伺いました。みみタロウから読者のみなさんへのこれまでの感謝の気持ちを重ねてお届けします!



私は今、滋賀大学教育学部3回生で、毎日充実した日々を送っています。私が日本に来たのは4歳の時。ブラジルから家族4人で長浜にやってきました。今、長浜には大勢の外国人が住んでいますが、その頃は、まだまだ少数。でもそれだけに、いつも日本人の間で過ごし、暖かい人々との出会いがあって、今の私がいます。

まず、私たちが最初に住んだアパートの大家のおじいちゃん。日本に来たばかりで何もわからない私たち家族を自分の家族のように大切してくれました。幼稚園の制服を一緒に買いに行ったり、上靴に名前を書いてくれたのもおじいちゃん。残念ながら昨年亡くなりましたが、いつもかわいがってくれて、私にとって本当のおじいちゃんです。そしてもう一人大切な人は、お隣に住んでいたおばあさん。幼稚園では最初、心細い思いをしましたが、幼稚園から帰りに、おばあさんの家に寄って、遊んでもらって楽しかったことを覚えています。川と一緒に梅干しの梅を洗ったりしたものいい思い出で、外国人なのに私が梅干し好きなのもそのせい。おかげで小学校に上がる頃にはすっかり日本に慣れていました。一番大変だったのが、小学3年の時のこと。1年間ブラジルに帰国してから戻って来たら、日本語はすっかり忘れ、勉強もわからなくなり、給食も食べられない状況に戻っていました。そのピンチを助けてくれたのが、先生と友達です。「お茶碗に残ったご飯は寄せて、最後の一粒まで食べるよ」など、万事について優しく教えてくれたのです。また、母が学校に来られない時には、友達のお母さんが母親代わりになってくれ、学校では寂しい思いもいやな思いもすることなく過ごしました。

中学時代はバレー部に入り、部活三昧の生活で、学業の方は散々。みんなと一緒に一番で、外国人扱いされるのが嫌な年頃。家族とはポルトガル語で会話していましたが、学校では母とポルトガル語で話すのも恥ずかしくなってきたことを覚えています。でも高校生になって友達に、「ナタリー、めっちゃ、日本人やな。」と言われて、逆に「私は日本人ではなく、ブラジル人なんだ」と自意識が芽生えることになりました。

今は少し大人になって、ブラジル人であることに大きな誇りを持ってますし、もちろん友達の前でポルトガル語を話すのも平気。母国語が話せて、本当に良かったと思います。

私の夢は、保育士になること。素敵な先生方と出会って私も先生になりたいと思ったのと、幼稚園でつらかったこともあって、外国人の子もほっとできる保育園を作りたいと思っています。高校の時、滋賀大学のオープンキャンパスを訪問して以来、この大学に進学しようという目標を持ちました。それからというもの、放課後、先生方を捕まえては教えてもらいながら猛勉強し、無事入学することができました。だから、保育士になれたら、先生方やお世話になったみんなに報告して回るつもりです!

このような経験から、後輩の皆さんには、夢や目標を持ってほしいと思います。明確な目標ができると、無理だと思っていたことも頑張れるものだから。そして、日本人の中に飛び込んでほしい。広い社会に飛び込むと、たくさん素敵な人たちと出会えるし、視野が広がり、夢も目標も持ちやすくなりますよ。ブラジル人の後輩たちからは「仲間はずれにされるから日本人の間に入っていくのが怖い」とよく聞きます。でも、見方を変えてみてください。外国人ばかりで固まっていたら、日本人も怖くて声をかけられません。中には好意的でない日本人もいるかもしれないけれど、それはほんの一部。日本人の友達からは「外国人と友達になりたいけど、しゃべったことない」と聞いたり、「外国人の友達がいてうれしい」と言ってもらったりします。どちらも友達になりたいのに、なんという矛盾! みんな、一歩踏み出して日本の社会の中で夢を叶えようよ! そして、外国人の親には、是非とも子どもたちが学業を続けられるよう後押しをしてほしいのです。私が今、夢に向かって進んでいけるのは、「大学に行って夢を叶えるように」と、どんな時にも後押ししてくれた両親のおかげで、お父さん、お母さんには心から感謝しています。

そして、最後に、日本の皆さんには、ここで育つ外国人の子ども達も大活躍できるような開かれた日本社会を作ってください。よろしくお祈りします! なんて言っても、私たちはもう、グローバル社会の中で生きているのですから。